◆『戦史秘話』第十一話◆

潜水艦の輸出－タイ海軍との交流－

昭和 13（1938）年 6 月 5 日、神戸港から 4 隻の潜水艦がバンコクに向け出港しました。各艦には 30 名ほどのタイ[1]海軍の乗員が乗り組んでいました。潜水艦は、基準排水量 370 トン、全長 51 メートルで、決して大型とは言えませんが、日本が潜水艦を輸出した初めての事例となりました。潜水艦には推進機関としてディーゼルエンジン 2 基が搭載されており、水上では約 15 ノット（時速約 28 キロメートル）、水中では約 8 ノット（時速約 15 キロメートル）の速力を出すことができました。武器として、魚雷発射管 4 門、高角砲 1 門、機銃 1 門を備えていました。

タイへの艦船輸出の歴史

日本が最初にタイに艦船を輸出したのは、明治 37（1904）年のことでした。タイ王室専用の迎賓艇を川崎造船所が建造し輸出した記録が残っています。日本の皇室とタイの王室との間には、当時から深い関係があったようで、明治 44（1911）年 12 月 1 日、タイ王国の皇帝戴冠式に、明治天皇の名代として伏見宮博恭王殿下が参列されています。殿下の参列に際し、日本海軍の巡洋戦艦「伊吹」と通報艦「淀」がタイに派遣されました。その頃、日本とタイの関係は実に良好で、タイの注文に応じ明治 41（1908）年から大正 2（1913）年にかけて、駆逐艦 2 隻、水雷艇 4 隻の計 6 隻が日本からタイに輸出された記録が残っています。

大正から昭和初期にかけて、日本の造船技術は急速に進歩しました。同じ頃、タイでは軍の近代化が推進され、艦船を新たに建造して軍備を充実させようとする気運が生まれていました。タイは海軍力整備のために、昭和 10（1935）年から 6 カ年計画の予算を計上していましたが、当時のタイには艦船建造の技術がなく、海外へ発注せざるを得ない状況でした。タイは諸外国を相手に競争入札を実施、その結果、イタリアに水雷艇（300 トン級）7 隻の建造を譲った以外、合計 14 隻の艦船建造（海防艦 2 隻、潜水艦 4 隻、砲艦 2 隻、哨戒艦 3 隻、給油艦 1 隻、運送艦 2 隻）を日本が引き受けることとなったのです。冒頭に述べた昭和 13（1938）年 6 月 5 日に神戸港を出港していった潜水艦は、このときに受注した 4 隻だったのです。この 4 隻の潜水艦を輸出するにあたり、水上艦の輸出とは少し違った形でタイ海軍に対する支援が必要となってきました。この支援については、後ほど述べることにいたしましょう。

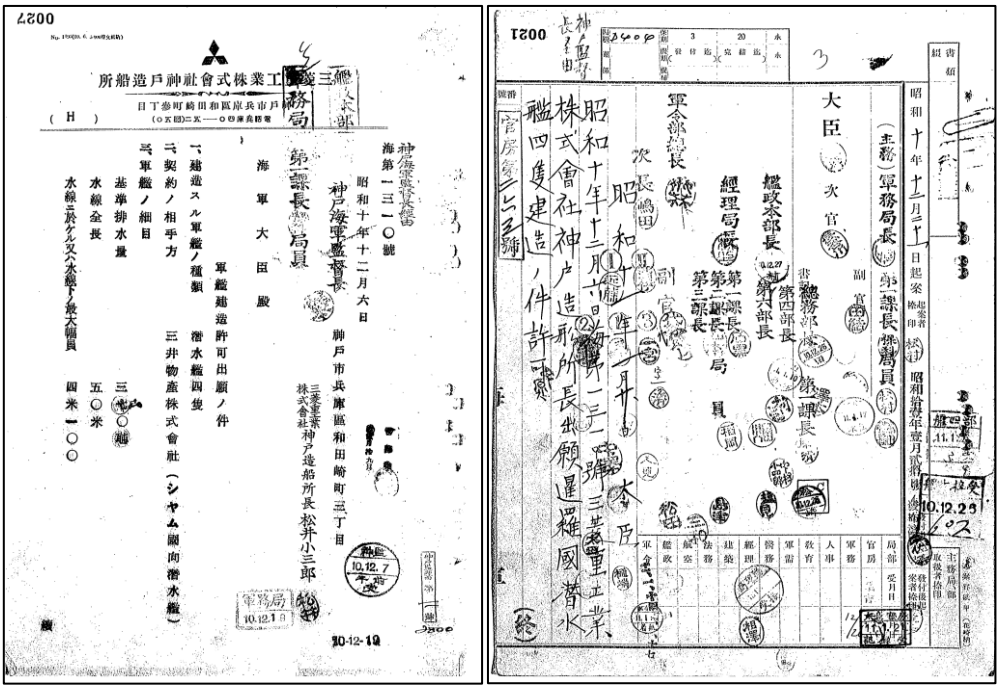
日本における潜水艦建造の歴史

ここで、日本における潜水艦建造について簡単に振り返ってみたいと思います。日本海軍が潜

[1] タイ王国の国名は、昭和 14（1939）年以前は「暹羅（シャム）」などと呼ばれていました。本稿では日常的に使用している「タイ王国」、「タイ」などと表記します。出典史料の名称などは原文に合わせて「暹羅」と表記します。

水艇[2]を採用したのは明治 37（1904）年で、潜水艇 5 隻をアメリカのエレクトリック・ボート会社に注文したのが始まりでした。そのとき、アメリカから建造に必要な材料とともに技師や工員、合わせて 78 名が来日しました。日本の工員にとっては、潜水艇の建造は初めてのことであったうえに、言葉の問題による意志疎通の不足も加わり、決して順調な建造とは言えなかったようです。これら潜水艇 5 隻の完成により、第 1 潜水艇隊を編成することができ、明治 38（1905）年 10 月 23 日に横浜沖において実施された日露戦争の凱旋記念観艦式において、初めて潜水艇による潜航運動を明治天皇に披露することができました。それは、同時に日本国民に対する潜水艇の初披露となりました。

その後、外国技術の導入に努めながら、日本独自の潜水艦開発の努力を重ね、国産の潜水艦を建造するまで技術が進歩しました。昭和 10（1935）年に至り、先ほど述べたタイからの発注で潜水艦 4 隻を三菱重工業神戸造船所において建造することになりました。潜水艦 4 隻の建造に関する申請は、神戸造船所長が同年 12 月 6 日付で「軍艦建造許可出願ノ件」を海軍大臣宛てに提出し、この建造願いに対する回答として翌昭和 11（1936）年 1 月 20 日付で海軍大臣から建造許可がおりました。



出典：「第 2621 号 11.1.20 三菱重工業株式会社神戸造船所長出願運羅国潜水艦 4 隻建造の件」「海軍省公文備考　昭和 11 年 D 外事巻 6」（海軍省-公文備考-S11-68-5050）
アジ歴レファレンスコード：C05034829900。

昭和 11（1936）年 5 月 6 日に起工された潜水艦の名称は「マッチャーヌ（*Machanu*[3]）」、「ウィルン（*Vilun*）」の 2 隻で、同年 10 月 1 日に起工された潜水艦の名称は「シンサムット（*Sinsamudar*）」、「プラーイチュンポーン（*Blajunbol*）」の 2 隻でした。

---

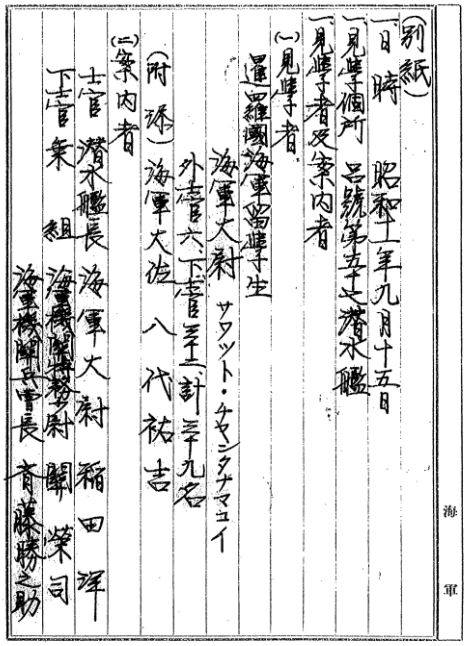
[2] 日本海軍では、当初は「潜水艇」と呼んでいましたが、大正 8（1919）年以降、「潜水艦」と呼ぶようになりました。
[3] 潜水艦名の英語表記については、『ジェーン海軍年鑑（艦船）1940 年版』の記載によります。

潜水艦輸出に伴うタイ海軍との交流

タイ海軍に潜水艦を輸出するに際し、水上艦の輸出とは違った形の支援を行う必要が生じました。当時のタイ海軍には潜水艦を操縦できる乗員がいなかったのです。つまり、タイ海軍の軍人に潜水艦乗員としての基礎的な知識・技能を教育する必要が生じたのです。その解決策として、タイ海軍から約 120 名の潜水艦乗員予定者が来日し、日本海軍が彼らの教育にあたることになりました。来日したタイ海軍の潜水艦乗員予定者が日本において受けた教育や、各種の行事などの様子を撮影した『暹羅国海軍潜水艦乗員　日本留学記念』という写真帳が残っています[4]。教育に従事した日本海軍の代表者は、海軍大佐八代祐吉でした。写真帳には八代大佐のほかにも、海軍の軍人や日本語教育に従事した語学教師、さらに造船の現場に立ち会った両国の造船監督官の名前も記載されており、貴重な記録となっています。

潜水艦乗員予定者の教育は、前期（昭和 11 年 6 月～同年 10 月）と後期（昭和 11 年 10 月～13 年 5 月）に分けて実施されました。前期の教育は船橋町（現在の千葉県船橋市）で、主に日本語教育が実施されたほか、日本海軍の基地研修や、名所旧跡の見学、地元住民との交流などが行われました。後期の教育は、神戸市に場所を移して実施されました。船橋町における教育の様子について、当時のタイの新聞に次のように紹介されています。「船橋は田舎であって夏季は海水浴等で賑わうが、その地における生活は若干不便であり且つ娯楽も少なくわが海軍将校等は、時々東京に出かけて息抜きをしている有様である。」船橋町における教育で使用された宿舎は、当時の私立船橋中学校で、タイ海軍の下士官は、校内にある武道館の北側に増築された寝室、炊事場、洗面所等で起居を共にしていました。士官は、学校の近傍にあった旅館を宿舎として使用したようです。

前期の教育期間中の昭和 11（1936）年 9 月 15 日、タイ海軍大尉サワット・チャンタナマユイを代表とする 39 名は、指導教官である八代大佐の引率で、横須賀を訪問しました。横須賀では砲術学校、横須賀航空隊を見学したのち、停泊中の潜水艦「呂号第五十七潜水艦」を見学しています。同潜水艦で、艦長から主要な性能要目について説明が行われました。その際、事前に指導教官が準備していた漢字、カタカナ、ローマ字の 3 種類の文字で表記された説明文が、艦内各所の装備品に掲示されていました。それがタイ海軍の留学生にとって非常に分かりやすく、貴重な見学となりました。


（別紙）
一日時　昭和十一年九月十五日
一見学個所　呂號第五十七潜水艦
一見学者及案内者
（一）見学者
暹羅國海軍留学生
海軍大尉　サワット・チャンタナマユイ
外士官六、下士官三十二、計三十九名
（附添）海軍大佐　八代祐吉
（二）案内者
士官　潜水艦長　海軍大尉　稲田洋
下士官　乗組　海機關務科　關榮司
海軍機關兵曹長　斉藤勝之助
海軍

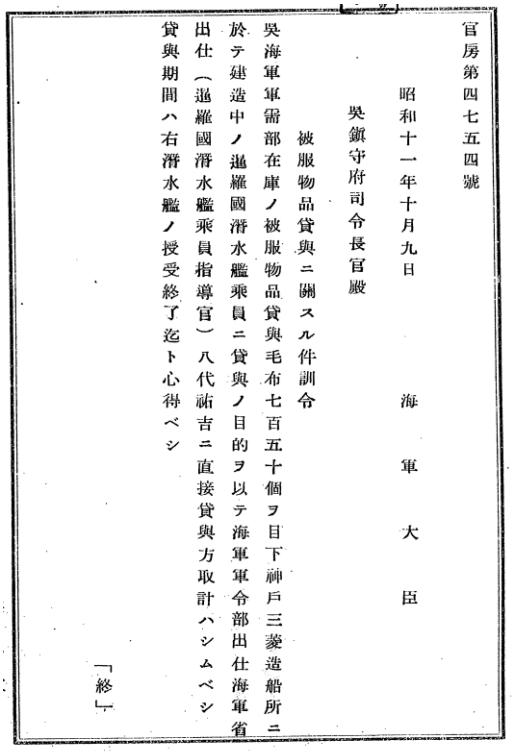
出典：「第 4295 号 11．9．11 暹羅国海軍留学生見学の件」「海軍省公文備考　昭和 11 年D外事巻 5」（海軍省-公文備考-S11-67-5049）アジ歴レファレンスコード：C05034827200。

[4] 暹羅海軍宿舎編『暹羅国海軍潜水艦乗員日本留学記念、昭和 11 年 6 月至昭和 13 年 5 月』は、国立国会図書館デジタルコレクション（https://id.ndl.go.jp/bib/000000717859）として、公開されています。

タイ海軍の留学生は、潜水艦関連企業なども見学しています。10 月 16 日には、精工舎（本所区柳島）、森永製菓株式会社（横浜市鶴見）、東京計器製作所（蒲田区）、日本光学工業株式会社（品川区大井）などの企業を見学する機会が用意されました。日本光学では「八米潜望鏡一型及び三型」、「六十六糎測距儀」の構造や、製造工程について説明を受け、工場の概要、光学兵器の保存取扱などについての説明も行われました。10 月 20 日には、沖電気株式会社（芝浦）、新潟鉄鋼所（蒲田）、古河電気工業株式会社（横浜）を見学する機会が設けられました。このように潜水艦に関連する多くの企業研修が実施されました。

こうして 10 月下旬を迎えたのですが、冬を迎えようとした日本の気候は、タイ海軍の留学生にとって経験したことのない寒さでした。常夏の国から来た彼らにとって、日本の寒さは想定外のことであり、防寒用の寝具などを持参することなく来日していたのです。海軍省の担当者は関係各部と調整を行い、タイ海軍の留学生に毛布 750 枚が貸与されることとなりました。

その際の文書が残っています。昭和 11（1936）年 10 月 9 日、海軍大臣から呉鎮守府司令長官宛てに出された訓令で、指導教官である八代大佐に直接貸与できるよう手配がなされ、送付先はタイ海軍の留学生が船橋町から移動する先の神戸市となるよう配慮されていました。


官房第四七五四號

昭和十一年十月九日　海軍大臣

呉鎮守府司令長官殿

被服物品貸與ニ關スル件訓令

呉海軍軍需部在庫ノ被服物品貸與毛布七百五十個ヲ目下神戸三菱造船所ニ於テ建造中ノ暹羅國潜水艦乗員ニ貸與ノ目的ヲ以テ海軍軍令部出仕海軍省出仕（暹羅國潜水艦乗員指導官）八代祐吉ニ直接貸與方取計ハシムベシ

貸與期間ハ右潜水艦ノ授受終了迄ト心得ベシ

「終」

出典：「第 4754 号 11.10.9 被服物品貸与に関する件」
「海軍省公文備考　昭和 11 年 H 物品巻 2」
（海軍省-公文備考-S11-97-5079）アジ歴レファレンスコード：C05035065800。

今も続く日本とタイ王国との防衛交流

日本からのタイへの潜水艦輸出と、潜水艦乗員に対する教育を日本海軍が実施した事例について史料を紹介しながら説明してきました。潜水艦という特殊な艦船を輸出するにあたり、約 120 名の潜水艦乗員の教育を日本海軍が実施しました。その乗員が乗り組んだ 4 隻の潜水艦は、6 月 5 日に神戸港を出港し、約 3 週間の航海を経て、29 日に無事にバンコクの王室岸壁に到着することができました。その入港をタイ王室の貴族、首相、国防大臣や海軍長官をはじめ多くの人が出迎えました。岸壁には、日本から輸入したばかりの航空機 6 機が展示されており、タイ海軍の近代化を象徴した場面だったと言えるでしょう。

4 隻の潜水艦は、その後 14 年間使用され、昭和 26（1951）年に退役しました。退役の理由は、潜水艦の命とも言うべき電池をはじめとした多くの部品が、日本の敗戦により入手困難となったためでした。潜水艦「マッチャーヌ」の艦橋と機銃は解体の際に取り外され、タイ海軍士官学校

の近くの海軍博物館に飾られています。

戦前に日本とタイ王国の間で実施された人的交流は、時代を超えて、防衛省・自衛隊になっても続いています。特にタイ王国からの留学生は多く、防衛大学校をはじめ、防衛研究所、統合幕僚学校、陸海空自衛隊の幹部学校等で教育を受けています。（令和 2 年度にはタイ王国から 11 名の留学生を受け入れています。）

（戦史研究センター　戦史研究室　石丸安蔵）